上京 史蹟と文化

発刊によせて
上京の史蹟
薪　能
春・秋の茶会
第１回ふれあい文化大学
上京区民ふれあいまつり
ふれあい写真コンクール
ふれあい史蹟ウォーキング

VOL. 1
1992

京都市長
田邊朋之

『上京・史蹟と文化』発刊によせて

「伝統と文化のまち・上京区」で地域各種団体の皆様方が、上京区民ふれあい事業実行委員会を結成され、各位のご尽力により、このたび『上京・史蹟と文化』が発刊されることは誠に喜ばしい限りであり、心からお祝申し上げます。

私は現在、京都に住み、働き、学び、憩うすべての人が、いきいきと充実した人生を築くことができる「健康都市　京都」の実現に向けて取組を推進しているところであります。

私は何よりも「人」を主役に据え、美しい自然と歴史的文化遺産を数多く有しているこの環境を大切にし、お年寄り、障害者、子供たちなど、すべての人が幸せに暮らすことができるあたたかい心のふれあいと心豊かに住み続けるまちづくりに努めてまいりたいと決意いたしております。今後とも区民の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

この半世紀、私たちの暮らしをめぐってさまざまな変化が生じました。この変化は、物質的な面を中心に私たちの暮らしを向上させましたが、反面、心に安らぎを与える緑の減少や地球的規模に拡大しつつある環境汚染などが大きな課題となってきております。

このような中で、この『上京・史蹟と文化』の発刊を契機に上京区を今一度見つめ直し、人と人のふれあいを深めることによって上京区民の皆様の豊かな暮らしが実現し、そしてこの機運が継続していくよう願っています。

上京区長
大阪三雄

人の住む町　そして　ふれあいを

上京は今、新たな困難な時期を迎えています。ご承知のとおりワンルームマンション、地上げ、そして町の中の空洞化が生じています。人口減、高齢化に加えて、町並みも変わってきています。また、学校の統合問題にも直面しています。

今こそ、上京の人々が歴史に学びながら私たちの町の暮らしを、町のあり方を一緒になって考える必要があると思います。

行政の役割は当然あります。しかし、地域の人々が、過去もそうであったようにふれあい、支えあって、町を良くしていきたいと思います。

豊かな表情をもっているそれぞれの学区の特性を生かしながら、上京区の町の豊かさを求めて、ふれあいを深めていきたいと願っています。

さいわい、昨年6月、実行委員会を結成していただき、いろいろなふれあい事業に取り組むこととなりました。この冊子は、まさに上京のふれあい、文化発信の役割を果たすものであります。

上京には、すぐれた文化があり、歴史があり、それに根づいた暮しがあります。そのことをふれあいの中から再発見し、そのことによって上京に住んでいて良かったとの思いを強くもっていきたいと思います。

人が住み、働き、学び、憩うそういう都市、上京でありたいと願い、そして愛する上京にいつまでも住み続けていきたいと願っています。

この冊子が皆さんの身近にあって、いつまでも親しまれることを願ってやみません。

発刊によせて

発刊に当たって

上京区文化振興会会長
中島孝廸

私たちの京都は、千年余の間、王城の地として、日本の政治、経済、学術、文化、宗教など、あらゆる分野の中心として歴史の上に大きな足跡を残してまいりました。そしてその上、ただ単に「古都」としての歴史的な遺産の魅力だけではなく、その後一世紀に亘る近代都市としても、日本の都市の典型的な形態を造り上げてきたのです。即ち、古典的なものと近代的なものとが調和した都市景観を誇る街、それが私たちの京都なのです。

しかし今、その京都が重大な危機に立たされております。それは、「開発」と言う名のもとに進められている企業本位の非文化的な行為にほかありません。そのため、周囲を取り巻く美しい山々は削り取られ、名水を欲しいままにした水脈は奪われ、祖先が心を込めた文化遺産もまた破壊されつつあります。

かつて京都は「応仁・文明の乱」によって焦土と化し、古代の遺産はことごとく破壊され尽くされました。しかし今日、「応仁の乱」後に生まれた「町衆」のように、この破壊の後を復興させる力を期待させる「何か」があるでしょうか。そうした意味から考えますと、応仁の乱以上の危機に直面しているのではないかと考えます。

私たちは、近代都市としての開発を決して否定するものではありませんが、千二百年に近いあいだ受け継がれてきた貴重な文化遺産と美しい景観を保護し、後世の子孫に伝える使命のあることも、決して忘れてはならないことだと思います。

かつて、上京区文化振興会では『**上京の史蹟**』を昭和五十一年より十五年に亘り発行し、上京区の史蹟や文化の啓蒙に努めてまいりました。しかし、今回私どもは、これをより充実させ、より広い範囲で多くの人々にご理解願うため、この小冊子の刊行に踏み切りました。従いまして、本書の性格上、今までの『上京の史蹟』と一部重複することはあろうかと存じますが、何卒その点は宜しくご了承賜りますよう、お願い申し上げます。

ともあれ、私たちのこの素晴らしい「**文化と史蹟の町・上京区**」を、皆様と共に守り育てていければ幸いに存じます。

上京の史蹟

一、上京区の成立

平安遷都によって王城が築かれた当時、京都の町は、中国の長安や洛陽の都を模倣した都市計画がすすめられ、左（東）、右（西）の両京によって構成されていました。しかも、左京を洛陽城に、右京を長安城になぞらえて築かれました。しかし、左京のみが人口過密となり、急速に発展した反面、右京はその地が低湿地であったためか、早くに衰退してしまったのです。京都がその後「京洛」と呼ばれ、地方から京都にくることを「上洛」「入洛」と言った所以は、このように洛陽を模した左京のみが意識され、ついにはそれが平安京の代名詞となったからであります。

ところが、平安時代末期頃より京都の町を南北に分けた、上辺（かみわたり）、下辺（しもわたり）の表現が用いられるようになり、それが中世になって、上町（かみのまち）、下町（しものまち）、あるいは上京、下京と呼ばれるようになったのです。しかし、当時の区画は今日ほど正確ではなく、おおむね、二条通りを境として上（かみ）（北）、下（しも）（南）両京に分離し構成されたようです。この頃の上京は、中心に御所と室町幕府の「花の御所」を擁し、北野天満宮、相国寺などの大社、名刹、そして、それらの需要を満たす多くの商、手工業者が町を形成しておりました。「応仁の乱」が終り、平穏な都市生活が蘇りますと共に、機業地としての西陣が誕生し、上京の政治的、生産的な性格が定まってまいります。

明治以降に定められた行政区画としての上京区、下京区の二区制は、人為的に構成されたものではありますが、古来の上京の名称を受け継ぎ、なお歴史的伝統を基礎としていました。その後、都市化が進むにつれ、近郊を含んで膨脹したため、その区域は次第に分割され、今日の上京区という行政単位に位置付けられるようになりました。

二、上京区の特色

現在の上京区は、東は鴨川、西は紙屋川、北は鞍馬口通、南はほぼ丸太町によって区切られたおおむね横長の長方形の地域であります。そして、その南北の中央を東西に平安京の北京極大路であった一条通りが貫き、さらに東西の中央を堀川が流れ、区を四つの地域に分割しております。このような地域区分の上に、中世、近世の上京が歴史的な展開をしてまいりました。即ち、東北地区には中世以来武家屋敷や公家の下屋敷が数多く存在し、東南地区は、中心部に御所と公家屋敷を擁する行政地区としての性格を持っていました。また、西ノ京や大将軍といった庶民の生活地域を持つ西南地区、そして、西陣と言われる代表的な伝統産業を包括する西北地区など、それぞれの地域が互いに特徴を持って形成されているところは見逃せないことではないでしょうか。

また、この上京区にはもう一つの特色があります。これは、京都の町に数多くある道路名や町名（ちょうめい）になっている「辻（ず）（図）子（し）」で、その半分以上が上京区に集中しております。この辻子（ずし）（図子）の由来は、町通りになる前の段階の道という意味です。即ち、一般的には、町通りから派生する横通りに対して辻子の名称が付けられたようです。従って特定の場合を除いては、辻子は小径（みち）、または町通りでない道ということになります。特に上京区の中で、一条以北、智恵光院以東、烏丸以西に辻子の集中地域があり、京都市内約百例のうち実に五十例がここに集中しています。なぜこのような現象が現われたのでしょうか。

平安時代、京都の北端の道路は一条通りであり、それより北は、人家も疎らな近郊の未開発地域でありました。しかし、中世になりますと、次第に都市化が進み、平安京の町が崩壊し、一本の道路を挟んで両側から対面する家々で構成される町が出現し出します。それに従って、烏丸通りや室町通り、そして、新町、油小路、堀川、大宮などの南北の道路が北へ延びました。延長した道路には、やがて町並みが成立します。これを例えば室町通りの例で見ますと、一条以北では、南から、小島町、福長町、北大路室町、築山南半町、築山北半町、裏築地町、そして最後に

室町頭町で終わる縦町が出来たのです。このようにして南北の道路は出来ましたが、一条以北では武者小路や北小路を除いて東西の道路はほとんどありませんでした。そこで南北の道路を連絡するために付けられた横道が、辻子だったのです。従って、辻子は南北方向の道路のように直線ではなく、不規則になっております。やがて、このようにして通じた東西の辻子にも両側から対面する家々が立ち並び、町並みが成立し、町通りへと発展していったのです。そして町通りに昇格した旧来の辻子は、辻子名を町名に止めるようになりました。ともあれ、辻子（図子）の集積地は、縦横の道路が碁盤の目に整備された平安京内とは異なり、おおむねそこが平安京外であったことと深い関わりを持っております。

上京区を代表するものが、御所と西陣であるとするならば、それはまさに京都の表徴であり、京都の町の典型であり、日本文化の原点であると言っても決して過言ではないのです。そこには前述の如き大社、名刹は言うに及ばず、小川の清流に添って不審菴、今日庵、官休庵などの三千家の家元が茶の湯の伝統を伝えております。また、鴨川のほとりには頼山陽が山紫水明処を構え、元誓願寺通小川東入るには、狩野元信が住んでいたと言われる狩野辻子が、また、油小路今出川上るには本阿弥光悦の生家があったと伝えられる本阿弥辻子など、文化・芸術の薫り高き旧跡が各所に点在しております。中でも上京を象徴的に示したものは、かつて応永六年九月、足利義満がその父・義詮の供養のために建立した相国寺の七重の大塔でしょう。この大塔の高さは約七〇メートルあり、その塔上からは洛中洛外が一望に眺められ、まさに壮観であったと、古文書は伝えております。しかし、この塔も四年後の応永十年、雷火によって焼失してしまいます。その後再建されるのですが、これも再び、文明二年の雷火のため灰燼に帰す運命にありました。現在もその地は、塔之段町として残されております。このように数奇な運命を辿った塔ではありましたが、中世末期から近世にかけて流行した「洛中洛外図屏風」に描かれた視点は、塔そのものはすでに消滅していたものの、この相国寺七重大塔からの眺望であったと考えられます。

このようにして上京区の占める歴史的地位は、京都そのものの生活の縮図であり、自然環境のもとで御所と西陣が作り出す古典的な都市の営みは、日本文化そのものであると言えるのではないでしょうか。

三、上京区の河川

平安京創設以前、鴨川は現在の堀川通りを真っ直ぐ南下し、四条から五条の間で高野川と合流しておりました。平安京の造営は、この河川の整備から始められたようであります。先ず、鴨川の流路を現在の位置に変え、出町で高野川と合流させ、真っ直ぐ南下させました。続いて、旧鴨川の川床を利用し、そこに堀川を造り、これを東堀川と名付けました。それと同時に、西堀川（現在の紙屋川）をこしらえたのであります。この東西両堀川は、京都北部の山岳地帯から平安京造営に必要な材木を伐り出し運搬するのが目的でありました。それ故に、この両河川に挟まれた地域に大極殿や大内裏が建設されました。紙屋川が西堀川であった証拠は、上京区の南西端近くに堀川町が現存し、それに南接して南堀川町（現在の行衛町）があったことによって容易に理解されます。また、これらを地図の上で見てみますと、紙屋川と堀川の距離が、一条以南に於いては、堀川と鴨川との距離にほぼ等しいところか

リプトンの新しいお店が白川通りに誕生しました。

リプトン 北白川店

営業時間　朝10時～夜11時

左京区白川通り一乗寺下ル
電話(075)722-7961

夷川五色豆

豆政

本　店／〒604 京都市中京区夷川通堺町東
TEL.075(211)5211～3
三条店／〒604 京都市中京区三条通河原町東
TEL.075(255)0390

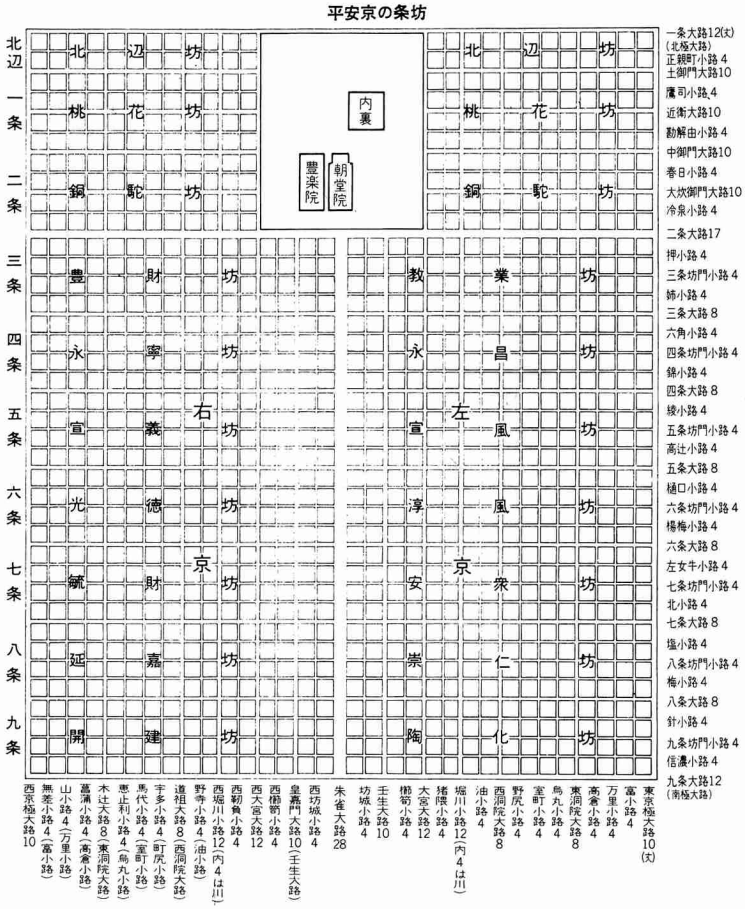
ら、これら三本の河川は、同一のプロジェクトによって人工的に流路を決められたことが理解できるのです。なお、人工によってその流路を換えられた鴨川は、その後、数百年もの間、「暴れ川」として氾濫を繰り返し、京都の人々を苦しめたのです。

この他、鴨川と紙屋川との間には、東京極川（ひがしきょうごくがわ）、小川、大宮川、耳敏川、西大宮川が流れ、特に東京極川は、現在の上御霊神社の前を南下し、相国寺を経て今出川通りで今出川となり、東に流れて寺町に達し、中川となって再び南下し、二条に於いて東行し鴨川に合流した川で、この川のほとりには貴族の邸宅や寺院などが立ち並び、まさに山紫水明に相応しい景観を誇っていたのであります。

四、上京の歴史的推移

古代

加茂氏、秦氏、出雲氏、八坂氏、土師氏などの先住民たちによって治められていた「やましろの国」は、延暦十三年（七九四）、平安京造営によりその様相を一変しました。その温和な土地は一挙にして都市とその近郊とに分かれました。盆地のやや北を東西に貫く古道が一条大路となり、その北は近郊で、南部は京内となったのです。そしてこの南部が東西に二分され、西半分が宮域（大内裏域）、東は京域と呼ばれました。この宮域の南部の一部分は現在中京区に属しますが、天皇の居所である内裏を始め諸官庁や重要機関のほとんどが上京区内に存在したのです。即ち、国家の中枢機関がここ上京区に集中しました。



また、上京区の南部東半分は京域で、一条大路、土御門大路、近衛大路、中御門大路が東西に走り、それらと直角に交差する西洞院大路、東洞院大路、東京極大路が南北に貫き、その間の小路を合わせて、碁盤の目状に土地区画がなされました。しかもこの京域をさらに室町小路で分け、西側は官庁に出仕する下級役人たちが起居し生活する官衙（かんが）町、東は貴族の邸宅となっていました。現在の上京区を平安時代に当て嵌めますと、そのほとんどが内裏、官庁、官衙町、貴族の邸宅で占められていることがよくわかります。京都が当時の日本の首都であったことを考えると、上京区はまさに日本の中心地であったわけです。

しかし、十世紀を過ぎる頃からその様相は次第に変化をしてきます。今までは京域外であった一条大路以北が徐々に開発され、都市域が北部へと拡大していったのです。その結果、上京区が

イタリアが好き！
イタリア料理専門店
レストラン
フクムラ
河原町店　中・六角河原町東入　255-5733（火・休）
四条店　中・富小路四条上ル　255-2060（水・休）
㈱イタシヨク（イタリアワイン・食品輸入元）（小売歓迎）
北・紫野大徳寺門前町　491-0900

人々の生活の上で纏まりのある生活空間へと発展していきます。こうした市民生活の発展は、やがて神社の祭礼の盛行へとつながって行きました。賀茂社の賀茂祭は大々的に風流をこらしておこなわれるようになり、その行路であった一条大路には観覧施設である貴族用の桟敷や、また、一般市民用の「町桟敷」までが出現する有様でした。また、市民の祭礼であった御霊会（ごりょうえ）も上御霊神社、下御霊神社を中心に盛んに行われたのです。御霊会とは、疫病の流行や政治的事件などで失脚し、怨みをもって死んだ人達の霊魂を鎮めるための祭であります。

こうした市民生活の活性化は、やがて平安京の規律を変えるようになり、律令国家の権力は次第に衰退し、それと共に内裏は荒廃し、十二世紀になると内裏一帯は野原となって人々の行き交う通路となってしまいました。

元久元年（一二〇四）、大内裏は再建され、再び律令体制が引かれたかに見えましたが、この時すでに、関東には鎌倉幕府が成立し、朝廷の威信は衰退の一途を辿ることになります。こうしたおりもおり、安貞元年（一二二七）の大火災が発生し、遷都以来一度も火難にあうことのなかった殿舎を含め大内裏のすべてが焼失してしまうのです。これ以後、内裏はついに再建されること無く、それと同時に平安という古い体制にも別れを告げ、武家勢力の台頭という新しい時代を迎えることになります。

中　世

鎌倉時代になると、上京区の一条通りを越えた東北部に公家邸が盛んに建築されだしました。こうした公家の北部への進出は、かつて農村や野原であった地が開発され、庶民の家々もまた北へ延び始めたことを物語っており、その結果として、人家の火災がしばしば文献に現れるようになりました。しかし、火災といえば、鎌倉時代初期の頃には、北は一条から南は二条、東は室町から西は西洞院に集中しているところを見ますと、いかにこの地域が人口密集地であったかがよくわかります。また、この頃から、この地域のことを指して「上町（かみのまち）」と呼ばれるようになり、その言葉が「上京」に変化して行くのであります。

暦仁元年（一二三八）、鎌倉幕府は洛中警護のため、各所に篝屋（かがりや）を設置します。現在の上京区内では、一条大宮、一条西洞院、一条町、安居院大宮に設置されましたが、これを見ても人口過密のため犯罪が多発し出したことになるのではないでしょうか。

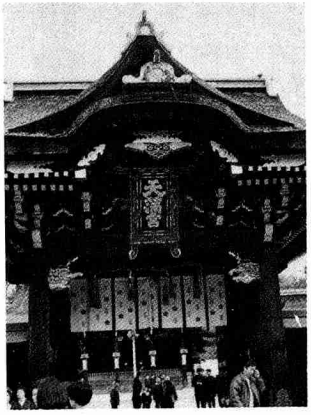
南北朝の争乱を経て室町時代に入りますと、上京区はその景観に於いても、機能の上からも大きな変化をきたします。

永和三年（一三七七）、三代将軍・足利義満は、柳原、北小路、烏丸、室町に囲まれたところへ「花の御所」を造営しました。この御所は室町通りに面した西側を正面としたところから、「室町殿」とも「室町御所」とも呼ばれ、八代将軍・義政まで歴代の将軍邸として用いられたのです。

ついで明徳三年（一三九二）、かつて北朝の皇居であった東洞院土御門御所が、正式に内裏に決定し、以後は場所についての大きな変動もなく、現在の京都御所へと繋がるのであります。このように室町時代の初期、公武の政庁が上京区の東北部に集まり、上京は再び政治の中心地に復活したのです。これに従い、武家屋敷や公家邸がこの近辺に甍を並べ、特に「花の御所」の周辺は、一色、細川、あるいは畠山といった有力大名の邸宅が軒を連ねたのです。この花の御所の東側に、至徳元年（一三八四）、壮大な規模を誇る相国寺が姿を現します。七重の塔をもったその威容は、まさに室町幕府の力を内外に示すに充分であったと思います。

一方、上京区西部においては、北野神社を中心として活発な商業活動が行われていました。即ち、鎌倉時代以降、大舎人の織手が中国の唐織にも劣らぬ立派な綾織を生産していたのです。また、北野社には七保と称する神人の集団があり、北野社の庇護の下に麹の独占販売など活発な商業活動を行っていました。しかも、この商業活動を自衛するため、町々の出資によって自衛組織までができていたことは、いかにこの西部地区が活発に活動していたかを物語っております。

この様に上京区の東部は、公武の政庁街として、また、西部は商工業の町として、まったく異なった都市機能を持っていたのです。



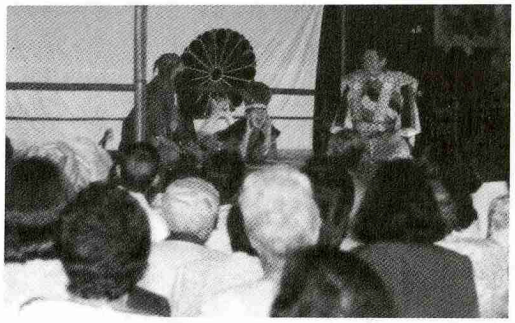
（以下次号に掲載）

Quick News

薪能

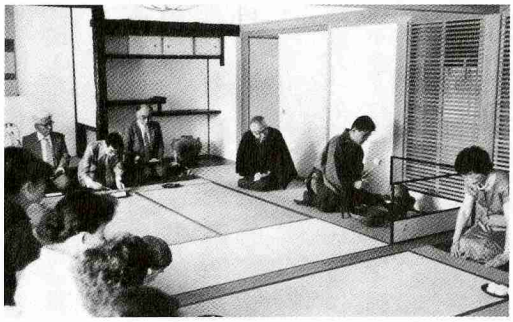
二十七回目を迎えた「上京区民薪能」は、九月二十日、例年通り上京区文化振興会と上京区役所の主催で白峯神宮において開催された。晴れわたった初秋の夕方四時からは、第一部として上京区民による舞囃子、仕舞、邦舞、琴の演奏が披露され、午後六時、日没とともに薪に火が入り、第二部に移る。

まず雅楽に集う会による舞楽「迦陵頻（かりょうびん）」が四人の子どもによって愛らしく舞われ、観世流の舞囃子「放下僧」をはじめ、観世・金剛流による仕舞六番や、宮城会による琴「春の夜」の演奏。つづく茂山千五郎・正義・逸平師三代による狂言「居杭（いぐい）」では、NHKのドラマで好演した逸平君のユーモラスな演技に人気が集まっていた。最後に河村禎二師の半能「絵馬」でしめくくられ、例年より多い七百人が薪能の醍醐味を味わった。



春の茶会

表千家の担当による上京区民春の茶会は、六月十六日、相国寺山内の承天閣美術館で催された。金閣寺の古材を用いた茶室「夢中庵」を本席、二階講堂を副席として三百七十人の来客で賑わった。



ふれあい事業について

最近、地域におけるコミュニケーションや、人と人との助け会いも薄らぎつつあり、さびしさを感じる時代となってきております。

急激な高齢化社会を迎える中で、人と人とのふれあいを大切にすることが求められています。

昨年まで「ちびっこ」を対象に親しまれてきた「ちびっこまつり」を本年度からは、これを拡大し、新たに区民の「区」に対する愛着意識の高揚を図るとともに、区民相互の交流と、ふれあいを深めることを目的とした「区民ふれあい事業」として実施することになりました。

上京区においては、区内の社会福祉協議会、文化振興会、体育振興会連合会、地域女性連合会、交通安全会連合会を中心とした「上京区民ふれあい事業実行委員会」を平成三年六月に結成し、いろいろなふれあい事業の企画推進に当たっています。

上京区は、ご承知のとおり、西陣織をはじめとする伝統産業と古い町並みの中にも、新しい町並みがうまく調和して発展をとげた区であり、人と人とのふれあいの中で、歴史と文化を築いた区でもあります。

このように伝統ある歴史と文化を基本として、上京区の特色を生かした「ふれあい事業」を実施することを目標とし、次のような「ふれあい事業」を実施してまいりました。

ふれあい文化大学

目　的

文化を通じ、人と人とがふれあい、「わが町上京」を見つめ直す一助とする。

日　時

平成三年十月九日(水)
午後六時三十分

場　所　西陣織会館

会　記（本席）
主　不審菴
掛物　即中斎筆一行
山是山水是水
花入　あけび手付置籠
香合　惺斎好　鎌倉彫鵜
七ツノ内共箱
唐銅朝鮮風炉
真形釜　清右衛門作
而妙斎好日月大高腰風炉先
屏風
黒掻合長板
水指　黄釉荒磯平　十ノ内
惺斎箱　妙全造
塗蓋宗哲作
茶器　即中斎好木賊蒔絵黒
大棗　共箱　一閑作
茶碗　吸江斎手造黒
銘蝸牛（かたつむり）　共箱
替　乾山写　竹の絵
即中斎箱　永楽造
茶杓　碌々斎作　銘常夏（なでしこ）　共筒
建水　朝日焼　棒の先
碌々斎箱
蓋置　竹引切
銘々盆ニテ
菓子　嘉祥　虎屋製
茶　珠の白　柳桜園詰

秋の茶会

上京区民秋の茶会は、十一月二十三日、相国寺山内の承天閣美術館で行われた。美術館の展示を鑑賞しながら四百三十名が夢中庵の本席と副席で薄茶のお点前を楽しんだ。副席は、禅寺の高僧の墨蹟に囲まれた豪勢な雰囲気であった。

会　記（本席）
床　鵬雲斎筆
松老雲自閑
花　はしばみ　太郎庵
花入　鵬雲斎好箱　萩
陶兵衛造
香合　織部　辻堂
風炉先　鵬雲斎好　渦紋
吉兵衛作
釜　真形釜　与斎作
炉縁　桐蒔絵　光春作
棚　鵬雲斎好　山雲棚
水指　鵬雲斎好　染付
竹泉造
薄器　鵬雲斎好　五葉棗
秀斎作
茶杓　鵬雲斎作　銘柴の庵

茶盌　鵬雲斎箱　大樋黒
銘松声
九代長左衛門作
替　鵬雲斎箱　吹寄せ
善五郎造
蓋置　一葉　五良三郎作
建水　丹波箪瓢
茶　和友の白　松籟園詰
菓子　秋の山　寿駿庵製
器　赤絵　妙全造
莨盆　鵬雲斎好　銀杏透
光春作

講　演　鯖街道と京の文化
講　師　作家・水上　勉
参加者　約四百名

上京ふれあいまつり

目　的
人と人とのふれあいを大切にして、地域の活性化をはかるために、区民の主体的な活動によって、身体に障害をもつ人たちにも気軽に参加してもらえる全区民を対象としたイベント。

日　時
平成三年十月二十日（日）
午前十時より午後三時迄

場　所
上京中学校・中立小学校の運動場と体育館

参加者　約五千名

ふれあい史蹟ウォーキング

目　的
健康ウォーキングをかねて、文化とのふれあいを目的に、区内に数多い史跡の中から三史蹟を見て歩く会。

日　時
平成三年十一月二十四日（日）午前九時三十分

場　所
①石像寺（くぎぬき地蔵）
②晴明神社
③北野天満宮

参加者　約三百名

ふれあい文化だより

目　的
区内の文化や史蹟、学区の文化活動の紹介を通じ、文化とのふれあい、人と人とのふれあいの場づくりをはかることを目的に、冊子「上京―史蹟と文化」の発刊。

発刊時期　平成四年二月

これらのふれあい事業により、上京区の伝統と文化の特色を生かして、お年寄り、障害者、子どもたちなど、すべての区民みなさんが幸せに暮らすことのできる、あたたかい心のふれあいと心豊かに住み続ける「まちづくり」を進めたいと願っております。

EVENT

第1回 ふれあい文化大学

「鯖街道と京の文化」

講演　水上　勉先生

第一回ふれあい文化大学は上京区民ふれあい事業の一つとして、ふれあい文化大学専門部会（北村広子代表幹事）により、上京区地域女性連合会の主管で、十月九日夜、西陣織会館で会場いっぱい四百名の聴衆を集めて開かれた。講師は上京区にゆかりの深い作家の水上勉氏、「鯖街道と京の文化」と題して、鯖が結ぶ故郷若狭と京のつながりを一時間にわたって語られ、じかに聞く文豪の講演に聞入った。

以下、その講演の要約である。

若狭と京都は昔から人や物につながって生きてきました。私は若狭の海辺の村に生まれて九才のとき京都の禅宗の寺へ小僧にきたのですが、こんな事は珍しい事ではなく尋常科を出れば京、大阪へ丁稚奉公に出るのは当たり前で、一九一〇年代はとりわけ、農村は不況でしたので、貧富を問わず農家の子は奉公に出たものです。今も京都にあるたくさんの料理屋さん、お菓子屋さんなど老舗のなかで若狭丹波丹後の田舎から丁稚や女中を雇わなかった家はないといっても云いすぎでないかもしれません。私の生まれた若狭本郷の村もそうでした。私が寺へきた年に、有名なお菓子屋さんの老舗今出川の玉寿軒へ上級生らが三人も丁稚にきていました。その中の一人で私の兄と同級生の典男君がいました。私のいた寺は烏丸上立売にあった相国寺でしたから、玉寿軒から丁稚さんが法事の饅頭やらお菓子の注文を取りに来ました。玉寿軒は京の本山御用達の老舗でした。典男が来た時ちょうど私は表の庭で草取りをしていました。典男は和尚さんに向かって「まいどういん」といって自転車を門にもたせかけて、和尚さんが最中を注文しなさると、もったいぶった言い方で、「和尚さん、今年は柏原のあずきが不作やそうで最中は休みどすわ」言いました。和尚さんはそれを聞くと、「そうか、そら残念やなあ」といってほかのお菓子を注文されました。何でも無いあたり前のような丁稚と和尚様の会話と思って頂いて宜しいのですが、実はこの会話が七十三才の今日も忘れられないことのひとつになりました。それはこういうことです。京のお菓子屋に丹波柏原の大納言あずきが送られていました。柏原はあずきの産地で、ここは海風を受けないのでおいしいあずきだということで評判になり、柏原の人はどんな山陰ででも精出してあずきを育てて毎年老舗に送りつづけていたのですが、その年は不作で送ってこなかったので玉寿軒ではよそのあずきは使わないで、あんこの菓子は休みだというのでした。のちに私はこの言葉から京の老舗が地方農村の産物を如何に大切に処遇したかということを学ぶようになりました。つまり典男くんは若狭からきた丁稚でありながら、丹波のあずきが不作だと玉寿軒ではあんこの入った最中やその他のあずきを使う菓子の製造をみあわせるといったのです。それをお客に告げてまた次の年の豊作を祈ったことを物語っています。今の人は、丹波のあずきが不作なら伊賀、甲賀のあずきを取り寄せてやれば客のニーズにもこたえられ、売上も伸びてよいと考えられましょうけれども昔はそんなことはしなかったのです。老舗の伝統の方が大切で、客もまた丹波のあずきを材料にして菓子を作る老舗に近江の材料を使えとは望まなかった。老舗と地方の村が喜怒哀楽を供にしていた証がここに現れています。なぜか京の食文化人は丹波の山畠で穫れるあずきを大納言と呼びました。たぶんこれにはわけがあって、何々の大納言様が、丹波のあずきの最中でないとお食べにならなかったのでしょう。老舗も又お口の肥えたお客さまによって創意をおしえられ、味を追求して、工夫を重ねたのでしょう。京菓子の伝統というものの側面が典男君の話にこぼれていたのだとのちに私は思うようになりました。

京都若狭はあずきの取り引きもありましたが、海産物の方が多くて、鯖やかれい、ぐじなどがそれぞれの旬を守って京の食前を彩っていました。京都には海はありませんから、魚は諸国から取り寄せて食べ方を工夫したのが特徴で、それが京料理でした。若狭のかれい、ぐじもいろいろな工夫によっておいしく食べられてきました。そのため私たち若狭の貧乏な家の子はぐじや鯛の刺身はめったに食べなかったものです。鰯や鯖のへしこは食べましたけれど。

鯖は若狭では浜焼きといっていっぴきのまま炭火で焼いて食べますが京都では丁寧に骨を毛抜きで抜いて鮨にいたします。いづうさんの作品はそれで有名ですが、その鯖を若狭からはこんだ道を鯖街道と呼びました。京都大原から、花折峠を越え、安曇川沿いに朽木へ下って今津から上中、小浜へ入る道です。そのほかにもけわしい山道を抜けてなるべくはやく京都の老舗に生の魚を届けようと人が開いた杣道があったようですが、今にのこっているのはこの道です。鯖が一人で来るわけはありませんでした。みな人間が運びました。夏の日は腐らないうちに運ぶのは大変で、人夫は夜通し交代で、裸にふんどし一本姿ではしったそうです。むろん冷凍車の無い時代でしたから。物と人が京につながって生きてきた魚の通った道は、汗の人の走り道だったといえましょう。

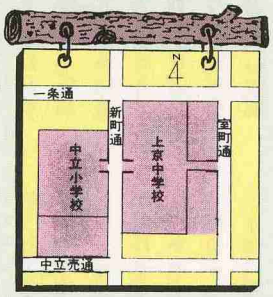
近松門左衛門に「大経師昔暦」という作品があります。「おさん茂兵衛」と主人公たちの名前を呼んで題名にした芝居や踊りがあって有名です。この物語りは、御所に出入りしていた有名な経師屋の手代茂兵衛と主人の奥様が、ふとしたことから疑われる羽目におち、姦通のぬれぎぬを着せられて逃げ迷った果てに、手代の故郷であった丹波柏原まで逃げて、山の穴に隠れていたのを友達の裏切りに見つかってしまって、縄をかけられて京都まで送られ、引きまわしにあって処刑される話ですが、悲しいのはその手代が奥様のお命を救おうとしてたどり着いた先が自分の故郷だったということです。そこしか行く所が無かった。奉公人が世間から指さされるようなことをした場合、むかえてくれる所は父母の住む在所をおいてほかに無かったということです。このことは今も変わりません。殺人を侵した犯人の故郷に刑事が張り込んで、凶悪犯人を捕まえるはなしはテレビをにぎわせています。近い松門左衛門は無実の手代の故郷を大納言あずきの取れる柏原になぜか選んでいます。いま柏原に参りますと、「おさん茂兵衛由縁の地」と彫った石碑が建っていて小さなお稲荷様が祭られていますが、私には大納言様の喜ばれたあずきの里から丁稚にきていた貧しい家の子茂兵衛が、大経師の店でたたき上げられて立派な職人になり、たぶんその作品は、御所の御用達の老舗だったというなら天皇様のお目にもとまったであろう襖や掛け軸になっていたろうことが想像されて、山畠のあずきとともに、殿上の人々とご縁をもてた物と人の絆が語られているように思えます。近松さんは声高くそのようなことをおっしゃってはいませんけれど、京都の文化の根本を、つまり職人の里と都のつながりに目を据えておいてこの物語りをすすめておられるということが私に今重要に思えます。

若狭も幾多の奉公人を京に送ってきた里でございます。おそらく、茂兵衛のようなひとがたくさんいたと思われます。昭和の始めに京の相国寺に自転車を留めて、和尚さんに向かって、「丹波のあずきが不作やさかい今年は最中は休みどす」といった若狭出身の典男君はその後裔だと思います。典男君は若くて死にました。肺病でした。丁稚奉公で一生を終え、茂兵衛のように手代にもなれずに、若くして死んだ若狭人は何百人もいたことでしょう。私はそのことを思うといま故郷に十五基もある原子力発電所のことが思われてなりません。今は昔ほど奉公に出る人はなくて、かわりに若者は高校を出ると京都の大学へはいってアルバイトで丁稚のような仕事をしていますけれど、その京都はなぜか電力を作らないで若狭から送られてくるものに甘んじ、エネルギー受益文化都市として夜も昼のように明るくして栄えています。いま京都の路地で街灯の無い道は殆どないでしょう。若狭の原子力発電所のお陰だといってもいいすぎではないでしょう。

私は、自分の在所のことでもございますので、遠い封建時代から現代にいたる、若狭と京都のつながりについて深く深く考えさせられながら生きて参りました。まさしく文化は道によって結ばれ、鯖も、人も、電力も、幾重にも重なった北山、美山、周山、鞍馬山をくぐって、細い道を運ばれてきています。その文化の道を踏み固めながら歩いた千年の、名もしれぬ人々のことを思わずにおれません。鯖街道はただの魚の道ではなかったはずです。ありがとうございました。私の話はこれで終りです。

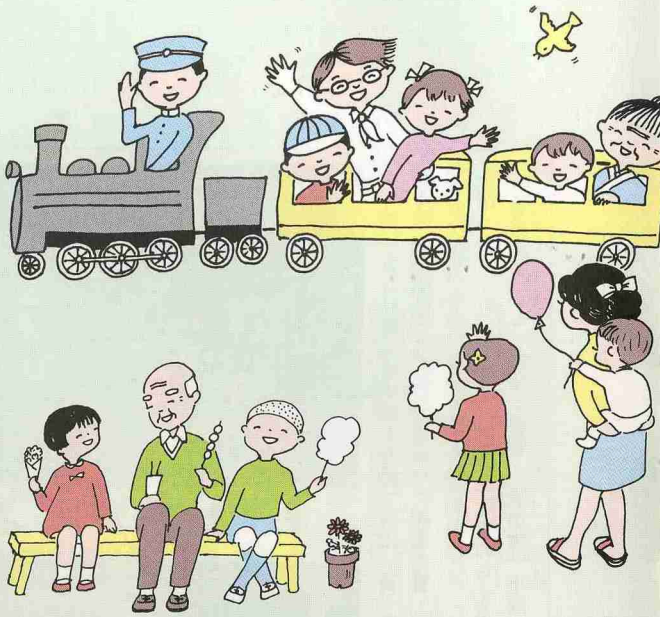
上京区民ふれあいまつり

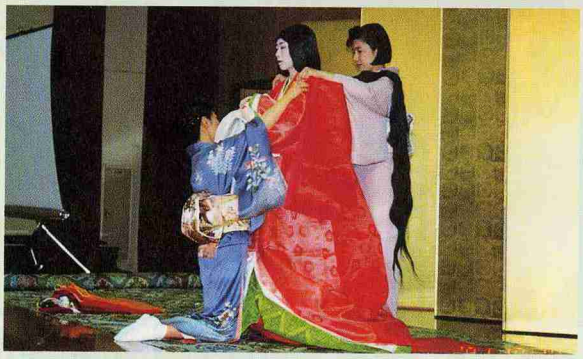
秋晴れの十月二十日、「上京区民ふれあいまつり」が、上京中学校と中立小学校を会場として開かれた。上京区民ふれあい事業実行委員会（福井総介代表幹事）が主催し、上京区社会福祉協議会が主管となり、傘下各団体が分担して、お年寄りから子どもまで幅広く楽しんでもらおうと計画された。



午前十時、カラーガードを先頭に、せいしん幼児園のかわいいマーチングバンド隊七十人が行進してスタート、会場には田辺京都市長の姿も見られ、開会の式典のあと、たちまち校庭と体育館は、お祭り気分にあふれた。

シンボルのふわふわ風船の中では子どもたちが翔んだり跳ね





たりして楽しく遊び、おたのしみ袋やボールすくいに興じたり、テントの下には、いか焼きやうどんなどの模擬店が並び、その中をミニSLが走り、健康スポーツコーナーでは老若入りまじって、マラソンソフトバレー、輪投げ、ゲートボールなどが行われた。体育館の舞台では、十二単の着付けショーや、折紙コーナー、民謡、カラオケ、交通安全教室、マジックショーなどがあり、車椅子体験やNTT福祉電話、お年寄住宅相談といった福祉をアピールしたコーナーにも人気が集まった。

また、写真コンクールに応募するカメラマンも人ごみをかきわけてシャッターを押していた。

上京区民みんなが楽しめるという今回の目的は五千人という多くの参加者を得て、盛況裡に午後三時終了した。

Quick News

ふれあい写真コンクール

上京区民ふれあいまつりの会場での「ふれあい」を主題にした写真コンクールは、初の試みながら多数の作品が寄せられ、上京区在住の写真家・浜岡昇氏らによる審査の結果、入賞三点、優秀賞五点、佳作七点を選び、上京区役所ロビーに展示した。

表彰式は十二月三日午後、上京区役所において行なわれ、式後、展示された写真を前に浜岡氏から講評を聞き、受賞者一同、あらためて写真のむつかしさを感じ取られたようであった。浜岡氏は「技術的には非常に優れた写真も多かったが、ふれあいを表現した作品に入賞の主眼を置いた」と語られており、今後のコンクール作品に期待がかけられている。

ふれあいまつり賞　西田　實

区長賞　樋口　徳三

文化振興会賞　一井　由清

優秀賞　山口　容常

優秀賞　西田　實

優秀賞　平岡　五男

優秀賞　三島　利則

優秀賞　今井　正隆

ふれあいまつり賞「めいわくな話」西田　實・**区長賞**「かわいい鼓笛隊」樋口　徳三・**文化振興会賞**「落書コーナー」一井　由清
優秀賞「車椅子ってむずかしいワ」西田　實・「あぁ面白かった」山口　容常・「鼓笛隊を見る」平岡　五男・「消防自動車」三島　利則
「上京区民ふれあいまつり」・今井　正隆
佳作「カッコいい」一井　由清・「広場のらくがき」山口　容常・「広場の汽車ポッポ」山口　容常・「広場のシンボル」山口　容常
「広場の裏方さん」山口　容常・「鼓笛隊」平岡　五男・「車椅子」三島　利則

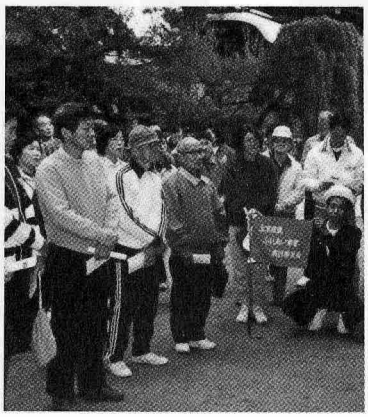
第1回 ふれあい史蹟ウォーキング

上京区民ふれあい事業における新しい試みとして、十一月二十四日、ふれあい史蹟ウォーキングが実施された。区内の三史蹟を順番に巡り、その説明を聞くというもので、ふれあい史蹟ウォーキング専門部会（松本雅年代表幹事）によって企画され、上京区体育振興会連合会が主管となり、三百名の参加者が日ごろ気付かない上京区内の史蹟を足でたしかめた。

北野天満宮では浅井与四郎宮司の案内で、神社の由緒を聞き、特にこの催しのために開かれた宝物殿を見学、改めて菅原道真の遺徳を偲んだ。晴明神社（堀川元誓願寺下ル）では、山口喜堂宮司や文化振興会の会員から占いの神様である安倍晴明の話や、堀川にまつわる昔話を聞き、釘抜地蔵（石像寺、千本寺之内下ル）では寺名の由来となった重要文化財の石仏について話題が絶えなかった。

山口喜堂晴明神社宮司

浅井与四郎北野天満宮宮司



永年の信用と実績
真心のこもったご奉仕

葬祭センター　株式会社 **公益社**

本社
烏丸三条下ル☎(075)221-4116(代)

北公益社／京都市北区紫明通堀川東入　☎075(431)7121(代)
中公益社／京都市東山区五条通東大路東入　☎075(551)0042(代)
南公益社／宇治市槇島町(文教短大前)　☎0774(20)0042(代)
滋賀公益社／大津市朝日が丘一丁目　☎0775(23)0042(代)

上京・史蹟と文化　第1号　平成4年2月1日　発行
上京区民ふれあい事業実行委員会　編集・主管　上京区文化振興会・上京区役所　印刷　和光印刷株式会社

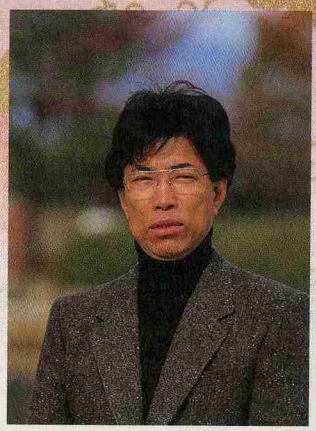
子どもたちのために。いま、人形文化を地球サイズで考えたい。

―日本の行事　五節句　世界に伝える―

元宮内庁京都事務所長
財団法人有職文化協会理事長　石川　忠

（五節供）

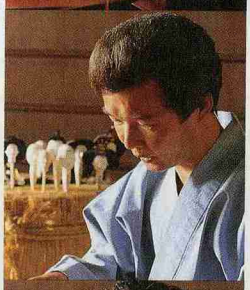
人日の節句　一月七日
上巳の節句　三月三日
端午の節句　五月五日
七夕の節句　七月七日
重陽の節句　九月九日



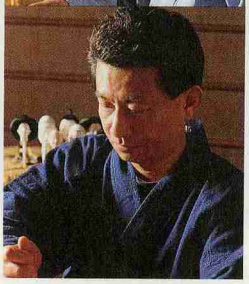
前京都国立博物館技官
大手前女子大学文学部教授　切畑　健

世界に翔く
正統の技を
守り伝え、
育くむ
有職司九人衆

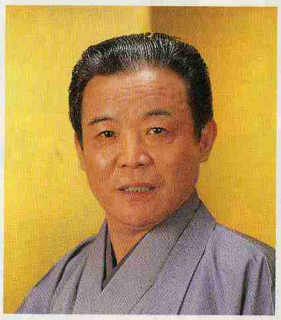
有職司　井上　競



有職司　水谷秀夫

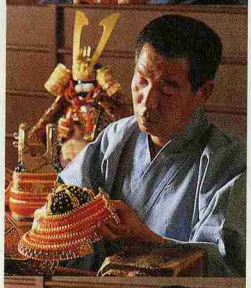


有職司　辻　健一

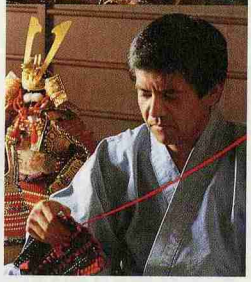


六世　島津豊泉

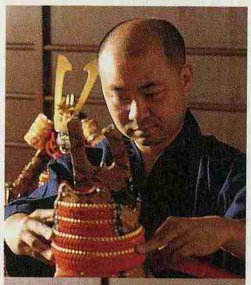
有職司　阪尾徹司



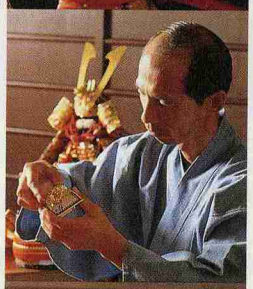
有職司　髙橋勝俊



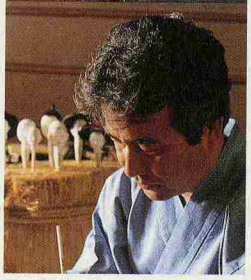
有職司　片岡正博



有職司　加藤清司



有職司　原田　登



有職司　山本正明